礎盤（そばん）

出土地：円覚寺跡（えんかくじ）

今回紹介する資料は、円覚寺跡の発掘調査で出土した礎盤です。礎盤は、建物の柱を支えるもので、柱の根本（ねもと）に設置されます。円覚寺跡では、輝緑岩（きりょくがん）という石が材料に使われた礎盤が見つかっています。

礎盤は、上面から見た形は円形で、縁（ふち）の部分には緩やかな抉（えぐ）りを巡らせています。中央部分には柱を固定するためのほぞ穴があります。上面をよく観察すると、柱の跡を見ることができ、実際に柱を置いて使われていたことがわかります。

国指定史跡である円覚寺は、1492 年から 3 年かけて建造された仏教寺院で、第二尚氏第 3 代尚真王が、父である初代尚円王の御霊（みたま）を祀（まつ）るために建立（こんりゅう）したと伝えられてます。首里城の北側に隣接しており、かつて境内（けいだい）には様々な建物がありましたが、沖縄戦によって大きな被害を受けました。

沖縄県教育委員会では、往時の姿を復元することを目的とした復元整備事業を実施しており、現在は三門の復元を進めています。戦前に撮影された三門の写真には、柱を支える礎盤が写っています。そのため、三門復元にあたっては、これらの礎盤は基礎資料の一つとして活用されることが期待されます。

金城　貴子